説教余滴　　訓練士

子どもたちが、犬を飼いたい、と願った時、私はどうしたか。
教会・幼稚園に住んでいる。いろいろな人が来ます。犬も可哀想になります。諦めなさい。
このように話しました。納得はしなかったかもしれません。子どもたちにはかわいそうなことでした。いまだに忘れることができません。親になった時、自分の子ども時代、できたこと・許されていたことをさせてあげられない、と言うのはつらいことです。

私の子ども時代、たいてい飼い犬が居ました。しかも、その飼い犬の世話は、子どもの責任とはされていなかった。いまさら責任逃れをするつもりもありません。犬の運動は、庭の高いところに針金を張り渡し、犬が自由に運動できるようにしてありました。さらに、週に何回かは訓練士が来て、状態を調べ、運動させていました。私が在宅の時であれば、そばによって訓練法を見たり、チェックポイントを教えてもらったりしました。
コリー種のヴィクのときは、大きなことを学びました。
コリーは頭が良く、プライドが高い。リード（引き綱）を強く引くと反発し、嫌がります。右に立ち、軽くリードを引いてすぐ緩めます。すると合図と判断し、引き手の足元に寄り添い、首を高く上げて良い形を見せて歩くものです。

犬種により違いがあることは大事なことでした。ロシアにはボルゾイ種、アフガニスタンにはアフガンハウンド種があります。どちらも高貴な種類で、その飼い主と想定される貴族の特質を共有しています。気位の高さなどと言われるかもしれません。しかし後になり、ロシアやアメリカがアフガニスタンで作戦を展開した時、アフガンの人たちは抵抗しました。庶民ですらアフガンハウンドに負けない民族意識を示しました。飼い主と愛犬は気質・体質を共有するようです。恐らく、歴史と気象・風土が培うものでしょう。